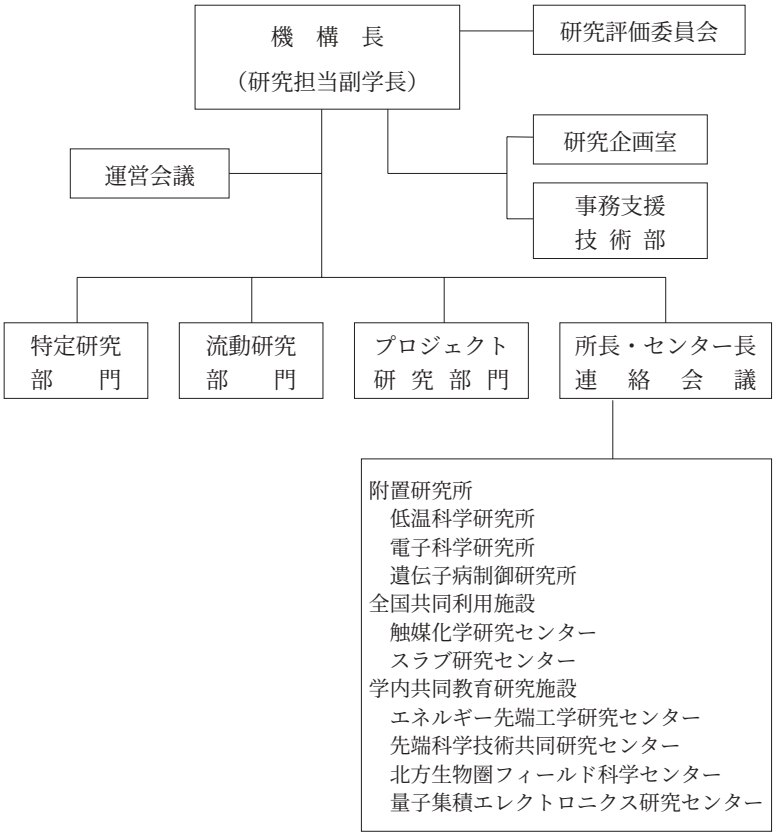
入　学　式

学位記授与式

「創成科学研究機構」の設置



創成科学研究機構の組織図

平成13年12月19日開催の評議会において創成科学研究機構（仮称）設置検討委員会から提出のあった同機構設置計画概要（中間報告改訂版）（以下「中間報告」という。）を基に平成15年度概算要求を行うことが了承されました。

本学には，同機構の省令による設置を待つまでもなく，学術研究を一層推進する責務があり，学際的な新学問領域を重点的に開拓することや社会的変化への機動的な対応を可能とする部局横断的な研究推進体制をできるだけ早期に確立することが求められています。

さらには，同機構の中核的建物となる総合研究棟が平成14年度には一部建設される予定であること，学内の研究資源を可能な限り活用して優れた研究の開拓に当たっている状態で，文部科学省との事前折衝を行う必要があることなどを総合的に判断し，直ちに学内措置として同機構の立ち上げ（実態の整備）を行うことが肝要です。

このようなことから，平成14年2月5日，同設置検討委員会において，機構の基本となる組織・運営方法等について検討し，学内措置による同機構の立ち上げについてコンセンサスを得，平成14年2月20日，現時点において構築可能な組織等を直ちに学内措置により発足させ，学内の優れた研究を推進する部局横断的な体制を整備することとしたものです。

現在，創成科学研究機構は，機構長は研究担当副学長が兼ね，研究企画室長として平成14年10月1日に前三菱化学㈱科学技術研究センター企画調整室部長の高橋　浩教授が就任しました。また，流動研究部門には平成14年12月20日，5部局（理，工，文，電研，農）6名が所属することとなり，特定研究部門においては，教授2名を公募中です。さらに，次世代ポストゲノム研究や，大型の競争的研究資金による研究グループで構成されるプロジェクト研究部門の検討も開始されています。

電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センターを設置

4月1日，電子科学研究所附属電子計測開発施設を改組・転換しナノテクノロジー研究センターが，時限10年の電子科学研究所の附属センターとして設置されました。

ナノテクノロジーは，半導体技術，材料技術，バイオテクノロジー，情報技術，環境技術など21世紀の産業革命を支える基盤技術であり，本来自然科学の全領域のみならず人文・社会科学にわたる超学問領域です。これは世界的な認識であり，米国をはじめ欧州，アジア各国においても分野横断・領域融合的な研究プロジェクトの創設に着手し始めています。一方，我が国においても，科学技術基本計画においてナノテクノロジー振興は重点課題として位置づけられ，現行のナノテクノロジーの強力な推進とともに，超学問領域としての「次世代ナノテクノロジー」の創成が急務になっています。

電子科学研究所では，分子・光・生命に関する科学が融合した「複合領域ナノサイエンス」の創出を目指した学際的な研究を展開しています。母胎となった「電子計測開発施設」は，光を用いた微粒子操作法により，フォトニック結晶を作製する技術を開発し，この成果はナノ光制御デバイスの開発に大きく貢献してきました。

「ナノテクノロジー研究センター」では，分子や原子を組織化してその集合状態を制御することによって，無限のバリエーションと機能を持つ素材の創製と，多様な機能追求に関する総合的な研究を行います。本センターは，ナノ材料研究分野，ナノデバイス研究分野，ナノ理論研究分野の3研究分野からなり，定員は，教授3名・助教授3名・助手3名の計9名です。

これらの研究分野により，分子の自己組織化を中心としたボトムアップ戦略を基軸として，半導体ナノテクノロジーの主流であるボトムダウン方式の融合をはかり，新しいナノサイエンス領域の創成を目指しています。同時にこれまで本研究所が行ってきた，ナノテクノロジー分野の研究者，とりわけ若手中心の研究者育成をさらに向上させ，我が国におけるナノテクノロジーネットワークの一翼を担うとともに，我が国の経済の発展と，国際的競争力の飛躍に貢献することを目的とします。

なお，6月22日（土）札幌全日空ホテルにおいて，開所式及び記念講演会が行われました。

医学部附属病院「北大病院ファミリーハウス」の利用開始

医学部附属病院に，北海道電力株式会社から「北大病院ファミリーハウス」が寄贈されました。

「北大病院ファミリーハウス」は，北海道電力株式会社が創立50周年を記念する社会貢献事業として，地域の高度医療を担う中心的医療機関である本院に対して寄贈の申し入れがあり，本院では，慢性疾患等の治療のため入院されている患者さんのご家族が，付添いなどで宿泊等を希望する際に利用していただく「ファミリーハウス」（国立大学附属病院としては全国で初めて）を寄贈いただくこととなりました。

寄贈式は，平成14年3月19日(火)，午前10時から「ファミリーハウス」内でとり行われ，北海道電力株式会社取締役社長 南山英雄氏から本学 中村睦男総長へ「ファミリーハウス」の目録贈呈，次いで同社労働組合執行委員長 渡部俊弘氏から本院 加藤紘之病院長へ「運営物品」の目録贈呈があり，中村総長，加藤病院長からそれぞれに感謝状の贈呈がありました。

「北大病院ファミリーハウス」は，4月1日から利用を開始しましたが，初日から8室ある宿泊室が満杯となるなど好調な滑り出しとなっており，長期入院されている患者さんのご家族に対するサービスの向上が期待されます。

「北海道大学法人移行準備委員会」の設置

7月24日（水）開催の評議会において，法人移行に向けた準備体制の一層の強化を図るため，従前の「法人化問題検討ワーキンググループ」に替わって，総長を委員長とする「北海道大学法人移行準備委員会」を新たに設置することが決定されました。

この準備委員会は，全学が一丸となって法人化に対応していくことが重要であるとの観点から，全部局長，大型計算機センター長，学内共同教育研究施設長，保健管理センター所長及び体育指導センター所長を含めた構成とし，また，準備委員会の下には幹事会と4つの専門委員会を設けております。

さらに事務体制についても，準備委員会を全面的に支援するとともに，法人移行準備に万全を期すため，事務局長を室長に専任職員を配置した「法人移行準備事務室」を新たに設置しました。

北海道大学法人移行準備委員会
（平成14年7月24日設置）

幹　事　会

組織運営専門委員会
〔検討事項〕
・管理運営組織
（役員会、運営協議会、評議会、部局長会議、各種委員会）
・総長の選考
・総長補佐体制
・部局長の選考
等々

目標計画専門委員会
〔検討事項〕
・長期目標
・中期目標・中期計画・年度計画
・評価への対応
等々

人事業務専門委員会
〔検討事項〕
・人事制度
・人事交流
・事務組織の再編
・安全管理
・就業規則の作成及びその手順
等々

財務会計専門委員会
〔検討事項〕
・財務会計制度
・施設マネジメント
・施設整備
・土地・建物等
・内部監査体制
・学内予算
等々

法人移行準備事務室

獣医学部創立50周年を祝う

獣医学部は，昭和27年4月に農学部から独立し，日本における唯一の国立大学獣医学部として設置され，今年，創立50周年を迎えました。

これを記念して，6月10日（月）京王プラザホテル札幌において，記念式典，記念講演会及び祝賀会が行われました。

記念式典は，午後4時から学内外の来賓，獣医学関係大学・団体，名誉教授，同窓生，教職員など約250名が出席し，喜田獣医学研究科長が式辞で我が国，本学における獣医学教育の歴史を振り返るとともに，「地球の自然・環境の悪化に伴って動物由来感染症の出現頻度が高まっており，その予防と制圧対策を確立しておくことは極めて重要な国家課題である。研究科一丸となって真理を探究し，もって国家社会に貢献し，人類の福祉に寄与すべく力を尽くして参りたい。」と力強く決意を述べました。中村総長から，これまでの獣医学部の教育研究の貢献を評価するとともに激励と支援を表明する旨のあいさつが述べられました。続いて，工藤智規文部科学省高等教育局長，須賀菊仁農林水産省生産局長（松原兼一大臣官房審議官代読）の祝辞を頂き，獣医学部創立50周年記念事業後援会に感謝状が贈呈され記念式典が終了しました。

記念式典後に行われた記念講演会では，唐木英明東京大学大学院農学生命科学研究科教授により「我が国の獣医学教育の問題点と将来」並びに山城茂人ゲルフ大学オンタリオ獣医科大学準教授により「北米における獣医学の現状と国立大学の改革」と題して講演が行われました。

記念講演会後，午後6時から記念祝賀会が開かれ喜田獣医学研究科長のあいさつに次いで，加藤清雄酪農学園大学獣医学部長，五十嵐幸男日本獣医師会会長，金城俊夫同窓会代表らが心のこもった祝辞を述べました。

前出附属家畜病院長の説明により「昭和27年7月18日に本学の中央講堂で行われた獣医学部開学記念式典の記録フィルム」のビデオ映写が行われ，出席者は懐かしく見入っていました。

来賓による樽酒鏡割り，井上副学長の発声で乾杯し，祝宴に入り歓談しました。

祝宴は，藤田副学長の前口上に続き，全員で「都ぞ弥生」を斉唱し，閉会しました。

6月11日（火）から14日（金）の4日間，獣医学部創立50周年記念市民公開講座「人と動物の未来を拓く獣医学－獣医学と社会との関わり－」が遠友学舎で行われ大勢の市民が参加しました。

公開講座の期間中遠友学舎において，獣医学部50周年の歩みがパネルで紹介されました。

電子科学研究所設立10周年（研究所創立60周年）を祝う

電子科学研究所の源は，第二次世界大戦中の昭和18年1月に，「超短波に関する学理およびその応用の研究」を目的として，北海道帝国大学の2番目の附置研究所として設立された「超短波研究所」にあります。戦時下においては，必然的に軍事の側面を持たざるを得ない運命にありましたが，超短波の発生のみならず，超短波による物質構造の解明，超短波の生物への作用機序の解明など，学際的な基礎研究を発展させました。ここには，物理，化学，数学を基盤とする工学及び理学の研究者が，医学・生物学の研究者と共同して新しい学際領域の研究を進めるという，今日の電子科学研究所の特徴的な姿勢の基盤を見ることができます。

超短波研究所は，終戦によって存亡の危機に立たされましたが，民生安定，産業再建など，当時の緊急課題に対処するため，超短波に限らず広く電気技術を開拓する応用電気研究所へと改称されました。当初は，電気系2部門，医学生理系2部門，物理系2部門，化学系1部門，数学系1部門の8部門，教官数18名で発足した研究所も，その後，大きく発展し，平成の世を迎えた折には，15部門1附属施設，教官数55名を擁するに至りました。

平成4年4月には，「物理学と化学と数学のみを基盤とした従来の学問体系では，21世紀における学術的要請にも社会的要請にも応えることができない」との認識に立ち，生物科学の成果をも基盤とする電子科学の開拓を目的として，電子科学研究所へと改組し，境界領域研究を推進するために4大部門制をとるとともに，分子認識素子研究分野などを増設しました。

21世紀を迎えるに当たり，電子科学研究所は，新たに開拓すべき領域として，光に関する科学，生命に関する科学，分子に関する科学の三つの科学が融合した「複合領域ナノサイエンス」を設定し，そのための新しい体制を整えることとなりました。我が国の従来の教育体系からいえば，これらの三つの科学は互いに異質に見えますが，その本質において相互に依存する度合いは非常に高く，これらの融合した領域の学術が将来の科学技術の母体になることは明らかです。生命の秘密を解明するためには光や分子を扱うナノテクノロジーを必要とするのは明白ですし，ナノ技術自体も天与の分子機械である細胞に学ばざるを得ません。この方向への第一歩として，本年4月に「分子・原子集合体の自己組織化によるボトムアップ手法」を基軸とする附属施設「ナノテクノロジー研究センター」が発足しました。また，大学院理学研究科生物科学専攻，薬学研究科及び遺伝子病制御研究所と連携して21世紀ＣＯＥ「バイオとナノを融合する新生命科学拠点」へ参画し，積極的に新領域の開拓に当たることとなりました。

以上のような変遷を経て，電子科学研究所設立10周年及び研究所創立60周年を迎えることができました。

記念行事として，12月9日に記念式典，講演会，祝賀会が行われ，また記念行事の一環として12月9日～11日に第4回電子科学研究所国際シンポジウム「機」が開催されました。

記念式典では，これまでの経緯を回顧，総括するとともに，温かい祝辞と激励の言葉を頂くなど，研究所の今後の発展に向けて決意を新たにする感動深い式典となりました。また，講演会では，北海道大学名誉教授（平成13年度北海道科学技術賞受賞，前所長）の井上久遠氏による「ナノサイエンスと新しい光科学－光も電子も空間に局在させて拓く世界－」と，岡崎国立共同研究機構分子科学研究所長（平成13年日本化学会賞受賞）の茅　幸二氏による「ナノサイエンスからポストナノサイエンスへ」の講演が，多くの参加者を得て行われ，深い感銘を与えました。

この後に行われた祝賀会には，多くの参加者を迎え，創立以来電子科学研究所にかかわられた方々とともに，思い出話と今後の発展へ向かっての語らいの場となりました。

北海道大学ーソウル大学校との第５回合同シンポジウムを開催

8月5，6日の両日，本学情報教育館において大韓民国ソウル大学校との合同シンポジウムが開催されました。

このシンポジウムは，平成9年10月に締結した大学間学術交流協定を記念して，平成10年から毎年行われているもので今年で5回目となります。

8月5日の全体会議は,「21世紀における大学改革の展望」をテーマに行われ，ＣＨＵＮＧ副学長及び中村総長のあいさつに続き，文部科学省合田大学課長及び韓国教育部ＫＩＭ大学行政課長からそれぞれ「大学の構造改革」について基調講演があり，その後両大学から忌憚のない意見交換が行われました。

今回は，初めての試みとして使用言語を韓国語及び日本語とし，逐次通訳により行われ，約150名が熱心に聴講していました。午後からは，大学院改革及び学部改革について両大学の現状と未来について講演が行われました。

8月6日は，工学研究科，獣医学研究科及び地球環境科学研究科が担当して，それぞれの会場においてサテライト会議が開催されました。

次年度は，大韓民国ソウル大学校で開催される予定です。

21世紀ＣＯＥプログラム(研究拠点形成費補助金)の交付決定

21世紀ＣＯＥプログラムは，我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を学問分野毎に形成し，研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため，重点的な支援を行い，もって，国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的とするものです。

本プログラムは，大学院博士課程の専攻等の研究教育拠点形成計画について，各大学の学長から申請を受け，学問分野別に第三者評価を行い，補助金を交付するもので，交付先を選定するに当たっては，日本学術振興会を中心に運営される「21世紀ＣＯＥプログラム委員会」で審査・評価等が実施されました。

平成14年度の予算額は，182億円で，各拠点に対し，5年間にわたり年間1～5億円程度が配分されます。

平成14年度は，5分野（生命科学，化学・材料科学，情報・電気・電子，人文科学，学際・複合・新領域）を対象に，国公私立163大学から464件の申請があり，厳正な審査の結果，50大学の113件（生命科学28件，化学・材料科学21件，情報・電気・電子20件，人文科学20件，学際・複合・新領域24件）が選定されました。

本学からは，8件の申請に対し，下記の4件が選定され，文部科学省から研究拠点形成費補助金の交付決定がありました。

21世紀ＣＯＥプログラム選定拠点（本学分）

分野名	主たる専攻等名	拠点リーダー	拠点のプログラム名称
生命科学	理学研究科 生物科学専攻	長　田　義　仁	バイオとナノを融合する新生命科学拠点
情報・電気・電子	工学研究科 電子情報工学専攻	田　中　　譲	知識メディアを基盤とする次世代ＩＴの研究
人文科学	文学研究科 人間システム科学専攻	山　岸　俊　男	心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点
学際・複合・新領域	地球環境科学研究科 大気海洋圏環境科学専攻	池　田　元　美	生態地球圏システム劇変の予測と回避

北大 Campus Visit―“キャンパスツアー”動き始める
―アドミッションセンターにおける広報活動―

北海道大学は，平成13年度入試からＡＯ入試を導入しましたが，その企画・実施のために平成12年4月1日にアドミッションセンターが発足しました。

アドミッションセンターは，ＡＯ入試の円滑な実施のほか，入試情報・大学紹介情報の提供，入学相談，大学説明会，高校訪問等の学生募集広報活動及びリクルート活動を業務として，入学者選抜企画研究部教官を軸に，学部等教官の協力のもとに機能しています。

アドミッションセンターの発足に伴い，それまで主として本学入学希望者を対象に行ってきたオープンユニバーシティ・体験入学に加えて，将来の進路をまだ決定していない者をも対象として，大学の雰囲気，学問の面白さを実感してもらい，高校生等が主体的に進路選択する上での必要な情報提供を積極的に行うこととしました。

その結果，修学旅行生や高校父母の会，また総合学習の一環として平成13年度に本学を訪れた高校生等は1,800名にも上り，ほぼオープンユニバーシティの参加者数に匹敵するものとなりました。こうした状況を踏まえて，これらの来学者に対して組織的に対応し，北大の資産を様々な形で提供する目的で「北大Campus Visit」を立ち上げました。

キャンパスツアーは，その中の一つのプログラムとして位置づけ，学部学生や大学院生がガイドとしてキャンパスを案内し，北大の環境や歴史，学生生活を知ってもらい，大学をよく理解してもらおうとするものです。アドミッションセンターでは平成14年6月以降，大学院国際広報メディア研究科 山田吉二郎教授の協力のもとに，北大元気プロジェクト「Campus Visit"ｷｬﾝﾊﾟｽﾂｱｰ"ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」の学生（大学院学生8名，学部学生24名）とともに，ツアーのコース設計及びガイドシナリオの作成を行ってきたものです。これらの作業は，学生の持つ豊かな感性と高校生に与える影響を考慮し，すべて学生の手によって精力的に行われてきました。これらスタッフによる4ヶ月間に及ぶ30回のミーティングを重ねて，10月5日（土）に広島県立西城紫水高校生37名を迎え，そして10月29日（火）には札幌北陵高校生102名を迎えて，実験ツアーを実施しました。実施後のアンケート結果は，総じて好評であり，訪問した高校生に良い感化を与えることができ，有意義なものとなりました。

その後，実験ツアーの検証をして，平成15年４月以降の本格実施に向けて鋭意検討を進めています。